

JAIF

国際結婚を考える会

Japan Association of Intercultural Families

会報誌第**3**号 www.kokusaikazoku.com/

【特集】『コロナ禍での国際家族の真実』



Page	CONTENTS	
	<p>『コロナ禍での国際家族の真実』</p> <p>第3号の特集はJAIFの海外に住む、関係する会員に投稿を呼び掛けたところ9名の方が快く応じてくださった。オーストラリア、タイ、カナダ、アメリカ、イギリス、ドイツ、スイス、フィンランドからの実体験です。</p>	
3	● ブリスベン、コロナ禍の生活	高山しの
6	● コロナ禍収束の時を待ちながら願うこと	山内陽子
9	● 2020年コロナ禍での我が家	M.Y
15	● アメリカのコロナ事情	ケリング眞理子
19	● My life in New York During COVID-19 コロナ禍の中での私のニューヨーク生活	カマーゴ・ニコラス 晃
25	● 「人類とコロナウィルスの闘い」の フィナーレは？	宮内はるみ
29	● コロナ禍のベルリンに暮らして	ノリス恵美
33	● コロナ渦中のスイス -だれが、どこまで自由を奪っているの？-	S.K
38	● コロナ禍のなかのヘルシンキ生活	朴沙羅
41	◆ 特集の編集を終えて～編集メンバーの感想	
42	<p>Essay ⇄</p> <p>『カルチャーショック』はマイナスからプラス面に向う</p>	マルソー中出眞理子
46	『国籍はく奪条項違憲訴訟』の裁判結果と 今後の国籍法改正要望の活動について	トルン紀美子
49	JAIF開催イベント報告 アンケートご協力をお願い	
51	総会開催について 次回予告	
52	編集後記	

ブリスベン、コロナ禍の生活



高山しの オーストラリア在住

2003年アメリカのミネソタにて結婚。2005年シドニー大学に就職しオーストラリアに移住。オーストラリア永住資格と同時にアメリカ永住資格を保持することの困難さから重国籍容認の必要性について考え会に入会。2006年長男誕生。2007年クィーンズランド大学に転職し、ブリスベンに転居。以来、ブリスベンで実母、夫、息子と暮らしている。

新聞はコロナばかりでコロナ前の日常が遠い昔の様に感じる今日この頃ですが、私の住むブリスベンではコロナの感染者はそれほど増えなくて、そこまで不自由に感じることはありませんでした。大学の授業もZoomになると言われた時には、どうなるのかなと心配でしたが、やってみればやれないこともないということがわかりました。これまでのことを時系列で思い出していつてみたいと思います。

搭乗中に入国制限が発令された中国からの院生

2020年2月。旧正月で中国に帰っていた私の指導している院生からFacebookで連絡が入りました。コロナで外国からの入国を制限するという話が出始めていた時でした。その院生が飛行機に乗っている間に入国制限が発令され、ブリスベン空港で入国を拒否すると言われた、こののです。入国拒否となると学生ビザが無効化されるらしく、「自発的」に帰国するということになる、という話でした。



「どうしようもない、Skypeでも会える。心配しないで」といって、また元来た道を帰らせるしかありませんでした。

中国までの帰路、飛行機の中でどんな気持ちだろうかと思って、いたたまれなかったです。

ブリスベン、コロナ禍の生活

高山しの オーストラリア在住

外出禁止の中でのリフレッシュ散歩で癒され

2020年3月。いよいよ色々な制限が開始されて、ずっと家の中にいるようになりました。息子の学校も大学も、授業は全部Zoomになりました。しばらくの間、大学生たちの中には入国を禁止されていない国に迂回してから、オーストラリアに入国するという方法をとる人もいたのですが、永住者かオーストラリア国籍の者以外、外国から入国できなくなりました。



家族で散歩（3月）

私の母親は、2017年からオーストラリアに移住してきているのですが、入国禁止の数週間前にオーストラリアに戻ってきただけでしたが、外出できなくなりました。買い物も高齢者はスーパーに行ってもいけないと規制されるようになりました。それでも、リフレッシュの散歩ならかまわないということだったので、週に一回くらいは近所の山に家族で出かけて、散歩しました。それまでは家族で散歩とありえなかったもので、結構新鮮でした。

Zoomでの授業では反応が感じられない

2020年4月～5月。一番つらかったのはこの時期だと思います。オーストラリアは日本とは季節が反対で、ちょうど寒くなり始めるころです。ずっと閉じこもっていて、息子はZoomで授業は聞いているけれども、きちんと学習できているんだろうかと不安になりました。ずっと机の前にいるけれど、ゲームをしていてもわからないし、四六時中見張っているわけにもいきません。

だから、家族で家の中でできることを考えたり、息子に課題を出したりといろいろ工夫しました。家族でパスタの手作りを試してみたり、TEDトークから議題を取ってきて、息子にTEDトークをやらせてみたりと、色々しました。今から考えてみれば、息子の教育が一番心配でした。Zoomでも授業はできなくはないですが、やはり生徒の反応をその場で感じられるというのは重要だとしみじみ感じていました。早く対面授業が始まって欲しいなと思っていて記憶があります。



手作りパスタ（4月）

規制緩和に向けて、QRコードで登録、感染者が出たらすぐに検査

2020年6月。いよいよ規制が緩和され始めて、十人までのパーティはしてもよくなりました。事前に友人たちと規制が緩和されたら、手作りパスタパーティをしようといっていたので、私と息子がパスタを作って、イタリア人の友人家族がミートソースを作ってというパーティをしました。やっぱり、みんなとワイワイするのは楽しいもんですね。



そろそろパーティ (6月)



カフェ (7月)

2020年7月～8月。息子の学校では対面授業が本格的に再開され、カフェなどの飲食店で外食もできるようになりました。飲食店に行くときには、QRコードというのを使って自分の住所等を携帯電話で登録することになりました。この規制は今も続いています。その後も感染者が出た時には、立ち寄ったところがすぐに発表されて、いつどこに行った人はすぐに検査を受けるようにという報道がされるので、それなりに役に立っているのかな、とは思っています。



不自由がなくなってきたブリスベン

2020年9月以降。段々と規制は軽くなり、普通に外出もするようになりました。大学の中をゆっくり歩いてみるということをしたことはなかったのですが、家にいる時間が長かったせいか、何もかもがありがたく思えました。

最後に。今でも大学の授業はZoomですし、入国を拒まれた大学院生はオーストラリアに戻ってこられずにいますが、ブリスベンの中での日常は不自由なことも大してありません。一年に一度は日本に戻っていた母が、日本に帰りたいと愚痴を言うのを聞くときは、正直面倒くさいなと思いますが、それくらいでしょうか。ただみんな、ワクチンを心待ちにしています

コロナ禍収束の時を待ちながら願うこと

山内陽子（タイ・石川県） 関連国カナダ

チェンマイの青い空を思い出しながら



コンドから見えるチェンマイの空

移住先のタイに戻れないまま、実家のある石川で早1年が過ぎてしまった。重い雲が垂れ込め、陰鬱で寒くて長い北陸の冬を越したのは、ほぼ半世紀ぶり。太平洋側は晴れ日本海側は雨や雪マークの天気予報を見ながらため息が出る。また正月明けには大雪が降り何年かぶりで雪かきもした。北陸地方の女性は辛抱強さにおいては天下一品といわれる所以がいまさらながらよくわかった。

南国暮らしに慣れた老体にはこの寒さはマジできつい。海も山も温泉ありの自然に恵まれて人々もとても優しい、冬をのぞけば文句のないそんな故郷で、時たまチェンマイの青空を思い浮かべる。いったいいつになったら帰れるのだろうか。

リタイアメントビザ取得し日タイ往来する暮らし

連れ合いの日本滞在が通算25年になると、「日本を出たい」が口癖で2012年頃から海外での居住地を探していた。親業も一段落して同意していたが、但し私は老親達の事もあり半年は日本という条件で。東洋文化が好きという彼の意向で、アジア地域に絞っていたが、その当時私はロングステイ関連の仕事をしていた事もありマレーシアで数回移住体験をしていた。ちなみにロングステイ財団実施の「ロングステイ希望国」調査ではマレーシアが14年連続で未だトップ。安全で安定したお国柄は日本人向きかもしれないが私達にはどうもしっくりこなかった。

その後タイに居住ビザがあることがわかると、機が熟すとでもいうように2015年5月に夫だけ早々とタイに移っていった。遅れて私も12月には、リタイアメントビザを取得し日タイを往来する暮らしを始めた。60半ば過ぎからの海外移住は心配していたが、再び異文化に触れる毎日は思ったよりも刺激的で心地良かった。また友人もできると行動範囲も広がり楽しみも増していった。

コロナ禍収束の時を待ちながら願うこと

山内陽子（タイ・石川県） 関連国カナダ

コロナで足止め、すでに1年以上

そんな私達は例年通り2ヶ月程の予定で2020年3月に関空に帰国した。2週間の自粛はしたが、その後あっという間にヨーロッパの国々などが次々と緊急事態宣言を出していき、コロナ禍の嵐が世界中に吹き始めたのだ。私達はすっかりここで足止めをくってしまった。帰国便が出始めたので領事館に問い合わせると、『自国民』か『永住者』などが優先され、リタイアメントビザ保有者は該当しないとすげない返答。まさかここで1年以上過ごすことになるとは誰が予想できただろう。

その前年に4千万人の外国人が訪れ、国のGDPの2割は観光収入に頼っているタイでさえ、即外国からの入国を禁止した。その水際対策もあってか、今年2021年3月10日時点で、感染者2万6501人死者数85人と、本当かどうかはわからないがダントツに数字は少ない。その理由として入国のハードルは日本と比べて非常に高いということがある。

まずタイ政府指定ホテルに自費で14日間の隔離、その間3度のPCR検査、入国ビザ要、入国許可証、申告書、健康証明書、PCR検査証明書、滞在期間の英文の医療保険証、14日間隔離施設の予約確認書、そして飛行予約確認書などの書類を領事館に提出し申請する。時間もかかり総費用も最低でも1人60万円以上かかる。どうしようかとウダウダしているうちにビザの期限が12月には切れてしまった。



タイの国花5月に咲くゴールドデンシャワー

チェンマイのコンドやバイクなど未だほったらかしで、どうなっているのか今は考えたくもない。手塩にかけた40個以上の植木も泣く泣く知人に全て引き取ってもらった。そして親しい友人が、家と家財を処分しオランダに帰国したり、ゲストハウスを経営していた友人も廃業したりと、日本人の居残り組も少なくなったという知らせが次々と入ってきた。

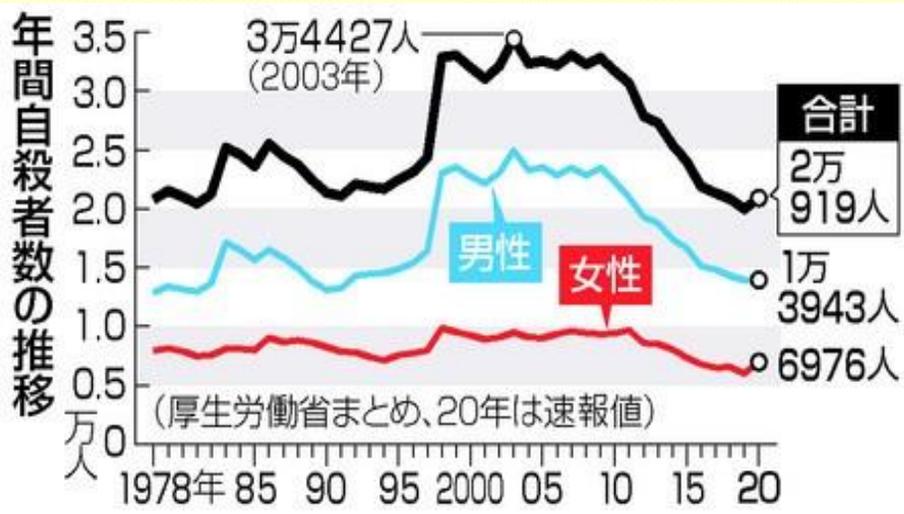
お馴染みのレストランやカフェなども閉店したと聞くし、街もひっそりとし静かだという。そんな色褪せて活気のない街を想像するだけで本当に悲しくなる。

コロナ禍収束の時を待ちながら願うこと

山内陽子（タイ・石川県） 関連国カナダ

日本の現状—命を絶つ女性達への対策を！

それにしても今このコロナ禍で起きている我が国での現状を知れば知るほど、私達がタイに帰れないなどは、所詮贅沢な悩みに過ぎないと思う事がとても多い。その中の一つに昨年、女性の自殺者が6976人と急増しているという記事を読みとてもショックを受けた。パンデミック発生後の失業者の7割が女性で、非常事態宣言後、非正規の仕事が無くなり困窮して精神的にも経済的にも追い詰められて自死した、というやり切れない現実だ。その命を断った女性達の3分の2が失業中だったということも殊更悲しい。



また家事や育児に神経を使わざるを得なくなり、ストレスフルになり自分を追い込み自殺に至るケースも多いとか。高齢者家族を訪れるな、という要請も孤独感を加速させただろうが、親や友達にSOSを発するなど、相談できなかったのか。

[昨年自殺者、11年ぶり増 コロナ影響か、女性深刻—厚労省速報値：時事ドットコム \(jiji.com\)](https://www.jiji.com)

国はデジタル化を推進しているというのが心のケアの窓口やセーフティネットはどうなっているのか、と怒りが湧き出てくる。緊急事態宣言延長などの対策やワクチン接種も大事だが、このような社会問題にもっと目をむけて対策を講じてほしいと心から願う。

コロナ禍での深刻な社会不安はまだまだ続いていくことだろうが私はもうしばらくここで静かにステイホームしながら春を待とう。



チェンマイの観光名所 ドイステープ寺

夫は母親の手術のため2ヶ月の予定でカナダへ

カナダ・トロントで1人暮らしをしている義母に脳腫瘍が見つかり、昨年4月に手術をすることに決まりました。1人息子の夫は、母親が歩行困難になり始めたため、その手術前後約2ヶ月の日程で航空券を手配し2020年3月12日東京を発ちました。トロントがロックダウンとなったのは現地に着くかしないかの時でした。

その後手術の実施について担当医の判断が二転三転した後にキャンセルとなり、夫の日本帰国の目途は立たなくなりました。その頃既にオンタリオ州では、必要不可欠ではない事業の営業停止命令、外出規制が出されていました。手術は未定のまま義母の筋力はあつという間に衰え、義母が寝たきりの状態に近くなってようやく緊急性が高いと判断され5月下旬に手術が行なわれました。

術後に移ったリハビリ病院から8月中旬に退院した時は、義母は再びひとりで生活できるまで回復するのか分からない状態でした。それでも、入院中はコロナのために夫が付き添うことも見舞うこともできずにいたので、自宅に戻ることができ皆ひと安心しました。



<子ども達が送ったお見舞いの手紙も、航空郵便の停止で戻ってきてしまいました。>

環境の変化が娘や夫や私に与えた影響

一方日本では、3月始めからの突然の小中高の休校要請が出され、3月半ばの娘の卒園式を終えた頃から徐々に外出を控えるよう呼びかけられ、習い事も中止、買い物や公園へも出掛けにくくなりました。緊急事態宣言が出された4月、小学校は入学式の翌日から休校となり、学童保育所からも自宅育成を促され、完全な自宅待機となりました。私個人で開いている子どもの絵画教室は休みにしましたが、翻訳やデザインなど自宅でできる仕事は続けていましたので、毎日自宅で娘と2人きりで過ごすのは辛く、姪（小3）と甥（小1）に可能な限り泊まりに来てもらったりし、子ども同士で遊び、助け合っどうにか乗り切ることができました。

ただ、環境の変化に反応してか娘は自宅でも私の姿が見えないとパニックになり、外では踏切が怖くて渡れず電車にも乗れず、前から歩いてくる犬も自転車も怖がり手が掛かるようになっていました。6月に入ると学校の分散登校が始まり、少しずつ学校や学童へ通えるようになると同時に私の教室の仕事も再開しました。密を避けるためのクラス分けをしたため時間が掛かり、娘の迎えを実家の母に助けてもらったりしました。

9月後半になると義母は次第に回復し、夫は冬になる前には日本へ帰りたくて情報収集を始めました。夫は半年の間、母親の家で自分の居場所もなく外へも出られずノイローゼ気味でした。私は15年振りのギックリ腰と、全く好きではなかったお酒に手が伸びる機会が多くなり、娘は「パパはもうかぞくじゃないみたい」と淋しがってパパのTシャツを抱いて寝ていました。娘の迎えを往復2時間かけて週2-3回してくれていた母も「体力の限界」だと言いはじめていました。



<マスク姿で運動会（娘の絵）>

一番のハードルは出国前72時間以内のPCR検査陰性の証明書

外国人は「特段の理由がない限り上陸を拒否する」とされており、日本人の配偶者である夫は「特段の理由」に該当したため入国は可能とされていましたが、特別な手続きが必要でした。中でも一番のハードルは出国前72時間以内のPCR検査陰性の証明書の取得でした。当初は外国籍の者だけに義務づけられており、日本国籍を持っていればその必要はないという不当な条件でした。

夫は保健所や病院、市、州、国の役所など思いつく全ての所に数週間かけて問い合わせたものの、検査機関ではコロナ感染の症状がある人が優先されており、もし仮に検査を受けられても、結果が出るまでに最低1週間は掛かるという所ばかりでした。みんな「Good luck」と言うだけだと夫は嘆きました。ジャパントイムズ紙にもその条件が壁になっていることが記事になっていました。

夫は運試しのように搭乗72時間前に検査を受けてみるしかないと諦め、航空会社にキャンセル料が掛からないことを確認して10月初旬の航空券を予約しました。



私は既に7月に空港での対処や入国後の条件を調べ、厚生労働省隔離政策相談窓口へ電話をしました。その時点では空港でPCR検査を受け、結果が陽性の場合には指定の場所で待機。陰性の場合には帰宅できるが、14日間の自主隔離が必要。自宅が無理な場合には指定の宿泊施設を利用。

空港からの公共機関の使用は禁止。自家用車で家族が迎えに行く、レンタカー、ハイヤーを使用する。指定の宿泊施設を利用する場合には費用の自己負担はない、との答えでした。

たらい回しの対応をする省庁窓口は 短期雇用のアルバイト

9月になって再度問い合わせると、PCR検査から抗原検査に変更され結果が出るまでの時間が短縮されていたのは良かった点でした。しかし今度は指定の宿泊施設を利用する際は全額自己負担だと言われ、無料だったはずだと尋ねると、初めからずっと自己負担だったとの説明。

また、「指定の宿泊施設」についても自分で好きな宿泊施設を探して利用との説明でした。その他にも以前と異なるところがあったので聞くと、法務省に問い合わせをとと言われ、法務省に電話すると厚生労働省の担当だと言われ、出入国管理局に電話してみるようになどたらい回しにされました。

結局厚生労働省の窓口に戻り話し聞くと、その相談員たちは短期雇用のアルバイトで、内容を詳しく理解せず誤った解釈で対応している相談員がいるのだと分かりました。

そんな無責任な！とちょっといじわるな気持ちになり「もし迎えにくる家族がなく、免許がなくレンタカーも使えず、経済的にハイヤーもホテルも使えなかったら、徒歩で家まで帰るのですか？」と言っても、返事は「さようございます」。「陽性でホテルに宿泊しても食事のために外出せざるを得ないと思いませんか」と言っても、「さようございます」と答えるだけでした。



予定通りの便に間に合った！緊張で体の震えが止まらなかった夫。9ヶ月ぶりの帰宅。



<娘の七夕の願いごと>

航空券を予約し、ようやく帰国と本人も私達も喜びましたが、州の検査機関が条件を変更したり、便がキャンセルになったりして延期が続きました。

しかしその間に、夫が友人から得た情報を元に問い合わせたWomen's College Hospital (WCH) から初めて、72時間以内の結果通知の可能性があるとという返事が得られました。

もうひとつ残っていた懸念は、日本政府の指定書類に検査結果証明の署名をしてくれる医師がいるかどうか、でした。

義母の主治医や知り合いのついでで医師に相談しても良い返事をくれる人はなく、WCHでもその証明書については曖昧なままでした。結果的には検査陰性の証明書に医師の署名をもらうことができ、予定の便にも間に合ったのですが、それも病院中を走り回った末に掴んだ運みたいなので、不安と緊張が極まっていたのか、全てが済んだ後もしばらく夫の体は震えが止まらなかったそうです。

そのようにして夫はようやく日本に帰ってくることができましたが、入国後2週間の隔離についても「海外渡航歴のある人（特に外国人）＝ウィルス感染源」というような雰囲気があったため慎重にならざるを得ませんでした。

自宅に海外から戻ったばかりの外国人がいるのに娘や妻は学校や仕事で人と接している、と悪い噂になるのではないかと懸念から、自宅ではなく長野にある山荘で2週間過ごしてもらいました（山荘の存在はとても幸運でした）。周囲には内緒にして空港から山荘へは私が車で送り届け、政府の規制ではその途中（約5時間）公衆トイレの利用も禁止でしたがもちろんそれは無理な話でした。

また、沢山の食料と必要な物はあらかじめ用意して行きましたが、2週間の間に食べるものは足りなくなり、デリバリーなど対象外の山の中ということもあり夫は私が置いていった車で買い物に出掛けるしかありませんでした。そして12月6日、9ヶ月振りに夫は自宅へ帰ってくることができました。

義母の淋しさを早く癒してあげたい。自由に行き来できる日を！

新型コロナウイルスのパンデミックと海外に暮らす親の世話が重なったことによる大変だった面ばかり書きましたが、もし義母が病を抱えてこのコロナ禍で1人きりになっていたらもっと深刻なことになっていたでしょう。親戚が少なく息子が遠い日本で暮らしている淋しさを隠せない義母ですので、今回の夫の滞在は親孝行になったのではないかと今は思っています。

そして早くこの状況から世界中から脱し、また国を自由に行き来できる日が来ることを心から願っています。



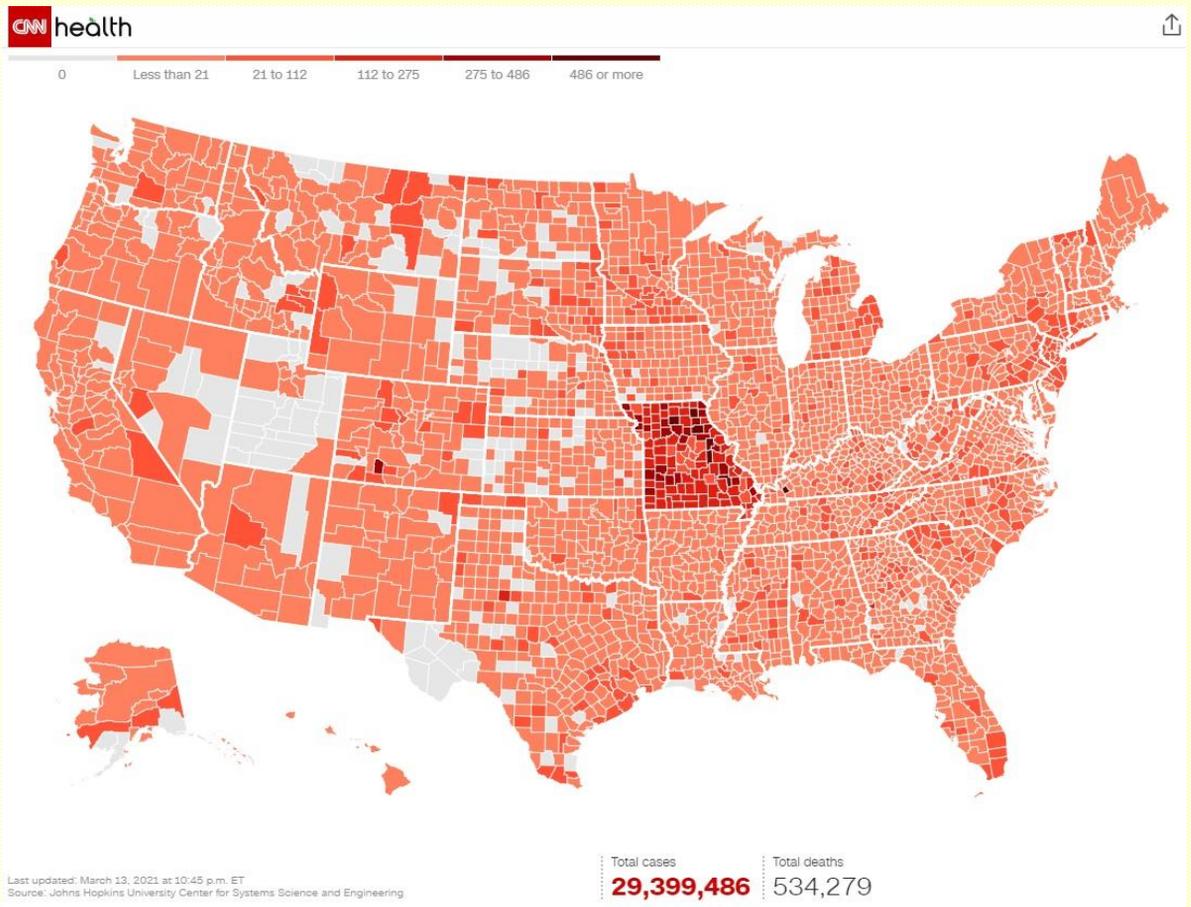
アメリカのコロナ事情



ケリング眞理子 関連国アメリカ

1978年に留学先のフロリダの大学で出会ったアメリカ人の夫と1984年に結婚。フロリダ、カリフォルニアを経て現在ワシントン州のスポキャンに住む。1992年に一人息子が誕生。

マスク派VS反マスク派の対立。コロナによる死者50万人を超え。



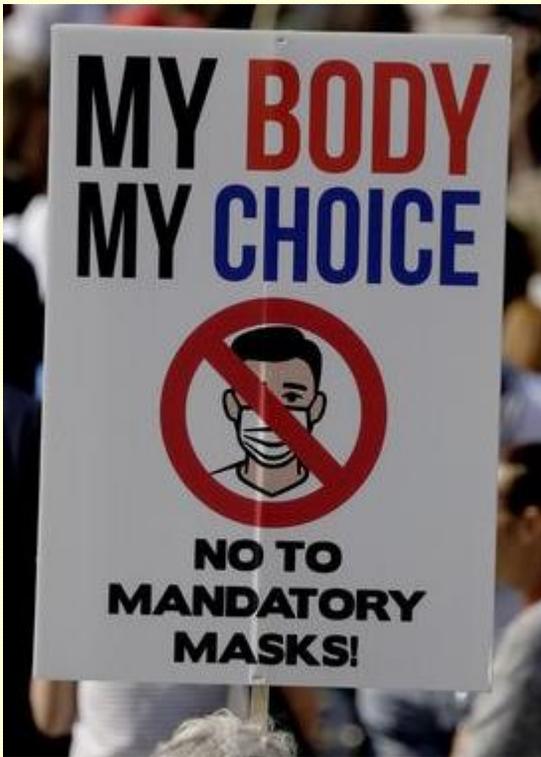
[coronavirus-us-maps-and-cases](#)

私と夫は5年前に24年余り住んだシアトルを離れて、同じワシントン州の東端のスポキャンに引っ越して来ました。ここは人口22万人の、州で2番目に大きい都市ですが、ハトやすずめのように、野生の七面鳥が日常見られるような野性味溢れる自然に恵まれた土地でもあります。

アメリカのコロナ事情

ケリング眞理子 関連国アメリカ

去る2021年2月22日、アメリカでのコロナによる死者は50万人を超え、町の至る所では死者をいたむために半旗の星条旗が翻っていました。昨年1月21日にこの国の最初のコロナ感染者が見つかったから早くも2ヶ月後に、感染者数で世界のトップに立ってしまったアメリカ。



こうなった原因が「マスク問題」であるのは明らかです。この国でコロナ感染が始まった頃、国民の健康を守る任務を任されたCDC（アメリカ疫病予防センター）もNIH（国立衛生研究所）もマスク使用の重要性を認めず、CDCがそれをコロナ収束の有効な手段として国民に奨めたのは、4月に入ってからでした。

11月の大統領選挙を控えてマスク使用が政治がらみになり、マスク嫌いのトランプ氏を支持する反マスク派の共和党、マスク派の民主党という図式が出来上がったこともコロナ収束に取り酷い痛手となりました。7月には州全体に公共の場でのマスク使用命令が発令されましたが、この際もマスク拒否の

客と店員の間でいざこざが所々で起こったり、反マスク運動が各地でおこりました。マスク使用を強制するのは、個人の自由の侵害だ、ということです。コロナは感染していても無症状の人がいて、もし自分がその様な人であった場合、他への飛沫感染を防ぐためにマスクをするのだ、ということがなぜこうも理解できないのか、私は腹立たしい思いでした。（昨年7月から8月にかけての世論調査：マスク使用率が民主党97%、共和党が70%）



第1波、第2波そして第3波を乗り越え

州によって対策はそれぞれ異なりましたが、私の住むワシントン州では、昨年3月23日に初めて「自宅待機令」が発令されて不要不急の外出が禁じられました。日常必要とされない職種全てと教育機関が一時閉鎖となり、自宅勤務やオンライン授業が行われるようになりました。医療現場でもまずビデオや電話で医者と面談した上で必要とみなされた時のみ医院に足を運ぶ様になり、処方箋は送付してもらったり、指定された場所に車を止めた上で、医局員に持って来てもらえる様になりました。その後感染状況に応じて種々の制限が緩和されたり、引き締められたりを繰り返しましたが、結局11月には春以来のロックダウンとなりました。

6月から8月の第2波と10月から2月の第3波をなんとか乗り越えたスポキャンは、2月中旬には晴れて2ヶ月ぶりにレストラン、スポーツジムなどが人数制限付きで開店し、それまで禁じられて来た居住者以外の人との集まりも5人まで可能になりました。



ワクチン接種開始、しかしマスクによるこの国の分断は続く

12月中旬からワクチン接種が始まり、病院、各種クリニック、スーパー、スポーツ施設などで連日行われていますが、まだ供給が需要に追いつかない状態です。予約はコンピューターが主流の為、コンピューター操作に不慣れな老人は予約取りに苦労をしています。

アメリカのコロナ事情

ケリング眞理子 関連国アメリカ

現在ファイザー、モデルナとジョンソン&ジョンソンの3種のワクチンが使用されていて、先発グループの医療従事者、高齢者、教師、保母さんなどが接種対象になっています。これらのワクチンを接種することによりコロナから守られるかどうか、又接種後にコロナに感染した人が他に移す可能性があるか、などはまだ分かっていないので、今後もマスク使用、社会距離、手洗いなどの継続が求められています。



ワクチン接種が日々進んでいる現在、当地では感染者数、入院者数が共に減り続けているので、3月に入ってから多くの学校が少なくとも、週の何日かは開校するようになり、多くのビジネスも再開しています。今後の課題はまず国民の大多数（70%から85%）に接種をおこない集団免疫を達成することでしょう。しかし2月11日付のスポキャンのローカル誌によると、すでに受けた、受けるつもりと答えた人が67%に対して受けない、多分受けないと答えた人が32%だったそうです。また、新たな問題としてコロナ変異種が世界各国で見つかっていますが、こうした変異種は現時点で7種も見つかっているようなので、ワクチン製造元は時を争って変異種の多くに効くワクチン製造の研究に日夜励んでいます。

我が州のみならず、国全体でも新しい感染者数や死者が減って来ていて明るい気持ちになっていたところ、先日となりのアイダホ州では州議会会堂前に集まった反マスク主義者たちが持ち寄ったマスクを燃やす、という示威行動を行なったと言うニュースが流れました。「マスク使用命令」が個人の自由の侵害で違憲だと言うわけです。残念ながら、まだまだマスクによるこの国の分断は続きそうであります。

4月を目前にした現在、アメリカ全国において再び新感染者数や入院患者数が増加する傾向を見せています。CDCのディレクターをはじめ多くの専門家達は第4波の発生を危惧し、国民にワクチン接種、コロナ対策の徹底を強く勧めています。第4波が来ないことを祈るばかりです。

My life in New York During COVID-19 コロナ禍の中での私のニューヨーク生活



原文ENGLISHは[こちら](#)

カマーゴ・ニコラス 晃 NY在住

ニューヨーク市在住のPRプロフェッショナル。25歳。在日韓国人の母親とコロンビア系アメリカ人の父親を持ち、様々な文化に囲まれながら東京で育つ。大学進学にともない渡米し、国際関係を学ぶ。また、英語の教師として、韓国の済州島に1年間滞在した経験を持つ。現在、ニューヨークのPR代理店に勤務。非営利団体がメディアに活動のストーリーを伝える支援、執筆を担当。

思わぬ恐怖と不安が新社会人を襲った

ニューヨーク市もやっと暖かくなり始めた2020年3月末、新しい仕事を始めたばかりの私は、ニューヨークに暮らす社会人として、人生の新しいステージに踏み出すことに胸を躍らせていた。ところが、そこには思わぬ恐怖や不安が待ち受けていた。新型コロナウイルス感染の拡大がトップニュースとなりはじめ、中国や韓国の各地ではロックダウンが行われていた。東京で暮らす母親と姉に連絡をとると、彼女たちも感染の拡大が東京に及ぶことを危惧していた。幸い私の家族は無事だったが、私はこのまま状況が悪い方向に進んでしまうのではないかという恐怖を抱き続けていた。

私の予測は的中した。その後、アメリカの各地でも新型コロナの感染者が確認されるようになり、カリフォルニア、テキサス、そしてニューヨーク州でも感染者が確認された。地下鉄や町の通り、そしてオフィスの中では、人々がうろたえ、パニックになっていた。公の場で誰かが咳やくしゃみをする、人々は恐怖のまなざしであたりを見回した。ある日オフィスへ行くと、突然自宅待機を通告された。私の頭の中では、これは予防的措置であり、2・3週間もすればオフィスに戻れるものと考えていた。

その夜、私は数名の友人たちと会い、この恐怖について語り合った。「これから2・3週間の間、夜出かけられなくなるなんて信じられないよ」私の友人はドリンクを飲みながら、そう言った。



My life in New York During COVID-19 コロナ禍の中での私のニューヨーク生活

カマーゴ・ニコラス 晃 NY在住

得体の知れないものに対する恐怖との闘い

翌朝、私は軽い咳と微熱で目を覚ました。たいしたことはない、と私はそのことを極力考えないようにした。しかし症状は悪化する一方。翌日の夜には高熱となり、突然味覚や嗅覚を失い、胸に強い痛みを感じた。私はパニックに陥った。しかし困ったことに、街中のあらゆるものがシャットダウンし始め、病院には瀕死の患者が殺到していた。助けを求めて電話したすべてのクリニックや病院からは、私が「ハイリスク」の患者ではないという理由で断られた。医師からは、検査はできないが感染していると考えるようにと指示された。身体の痛みや熱、そして胸の痛みも辛かったが、感染の初期から最も苦しかったのは、得体の知れないものに対する恐怖だった。

幸い私の症状は約1週間後、徐々に消えていった。その時点で、私が実際にコロナに感染していたかどうかを確認する術はなく、暗闇に取り残された気持ちだった。私は、コロナに感染したことを恥ずかしいことと考え、そのことは誰にも話さなかった。

回復してからの数ヶ月間は、静寂と騒音が入り混じった日々だった。私のアパートは、もよりの病院にほど近い交通量の多い街角に面していたため、必死でニュー Yorker の命を救おうとする、街中に鳴り響く救急車のサイレンの音で、私は何度も夜中に目を覚ました。サイレンの音が聞こえないときは、街は静寂に包まれていた。通りには歩行者や車の姿もなく、がらんとしていた。かつて賑やかだった歩道を歩く人も、めったに見ることはなかった。地元の露天商も、私のアパートの外に立つことはなく、子どもたちの公園も、まるで事件現場のように黄色のテープで閉鎖されていた。私の窓からの景色を見ただけで、最悪のシナリオが始まったことがわかった。ニューヨークは、まさに新しいパンデミックの震源地となった。



My life in New York During COVID-19 コロナ禍の中での私のニューヨーク生活

カマーゴ・ニコラス 晃 NY在住

自分の部屋の四方の壁以外の世界に、私がアクセスする唯一の手段がニュースだった。1日の死亡者数は、日々大幅に増加していった。フラストレーションからソーシャルメディアのフィードをスクロールすると、科学者や、政治家や、果ては大統領までもが、このウィルスとの向き合い方に、それぞれ相いれないツイートをしていた。ソーシャルメディアでは、今世界で起こっていることについて、誰もが自分の専門知識や意見を伝えようとしているかのようだった。

こうしたバーチャルな喧噪に囲まれてみてわかったことは、この未曾有の災害に対処するためのリーダーシップが、私の街にも、そしてこの国にも欠けているということだった。

毎日この混沌とした状況を理解するのに精一杯だった私は、日が経つにつれて絶望感と無力感に襲われた。



パンデミックが、人間の最も醜い部分、たとえば人種差別や偏見、そして憎しみといったものをあらわに

しかし、6月が近づくと何かが変わり始めた。白昼堂々、警察官の手によってジョージ・フロイドが殺されたことは、全米に衝撃を与えた。警官に拷問されて殺される黒人男性の映像を見たときの怒りは、すでにある傷口に、塩を塗りつけられたかのようなようだった。新型コロナの感染拡大がアメリカ人たちを家の中に閉じ込めていたものの、フロイドの死をきっかけに、私たちは家を飛び出して街に出て、街中でデモを行った。



その夏、私は、ほとんど毎週末、黒人の命よりも警察を守ることを選んだ政府によって殺害されたジョージ・フロイドのために、正義を訴え、そしてそれを要求して、ニューヨークの大通りを何百人ものプロテスターたちとともに行進した。黒人に対する人種差別に加えて、アジア系アメリカ人のコミュニティもまた、憎しみのターゲットとなっていた。

My life in New York During COVID-19 コロナ禍の中での私のニューヨーク生活

カマーゴ・ニコラス 晃 NY在住



パンデミックが発生してからというもの、多くのアジア系アメリカ人が、全米各地で人種差別を理由とした暴力の犠牲になった。「中国ウイルス」という言葉が、ソーシャルメディアで使われただけではなく、保守系のニュースコメンテーターの口から、そして前大統領の口からさえも聞かれたのだ。

ニューヨークのチャイナタウンのビジネスは立ち行かなくなり、ひとつ、そしてまたひとつと、老舗の企業が廃業していった。私の友人の中国人や、日本人や、韓国人の中には、同じニュー Yorker から攻撃を受ける不安から、公共交通機関を利用したり、通りを歩くことさえも怖がる人たちが出てきた。パンデミックが、人間の最も醜い部分、たとえば人種差別や偏見、そして憎しみといったものをあらわにしたのだ。

無力感、孤独感、絶望感などのネガティブな感情に負けない

こうした憎しみや偏見の中、私は、ロックダウンが始まって以来感じる事のなかった感情を持つようになった。人々の抗議行動や、アジア系アメリカ人に対する憎悪が頂点に達した頃、ニューヨークの多くの人々は、行動を起こす必要性を感じ始めていた。私は、3月以来会っていなかった友人と、現在の世界の状況について率直な議論を交わした。また、警察の暴力によって他の黒人たちが亡くなったというニュースが絶え間なく流れてくるなか、私は同居する父と、警察による暴力や、構造的な人種差別といった、話しづらくはあっても、話さなければならない話題について話をするようになった。私は、自分が通っていた東京のインターナショナルスクールの卒業生とZoomで会話をし、人種差別がアメリカ、または欧米だけの問題ではなく、ニューヨーク市から何千マイルも離れている私自身のふるさとのコミュニティーにまで浸透している問題であることについて議論した。

My life in New York During COVID-19

コロナ禍の中での私のニューヨーク生活

カマーゴ・ニコラス 晃 NY在住

夏の間に関った出来事は、ある種の再確認であった。つまりそれは、無力感、孤独感、絶望感などのネガティブな感情に負けるのではなく、行動を起こし、自分の周りの世界とつながる必要性だった。

身近なところで言えば、私はニューヨークの自分の近所で、地域の絆を深める活動に参加し始めた。パンデミックにより、何百万人ものアメリカ人が職を失ったことは紛れもない事実であり、またその結果、多くのリスクを抱えた人々（特に高齢者など）が、基本的な支援を求めて家を出ることに不安を感じていた。こうした中、各地で「相互扶助組織」と呼ばれる団体が結成され始め、地域住民が、新型コロナ検査キットや、食料品などの生活必需品を支給するために、ボランティアとして時間と労力を提供するようになった。



私が住むニューヨークのハーレムでも、独自の相互扶助組織を作っていることを知り、すぐに参加した。相互扶助のボランティアをしていると、他では出会う機会がなかったであろう近所の住民の方々とたくさん出会うことができた。私が毎週食料を届けていた隣人の一人であるローザは、私の家から数ブロックしか離れていないところに住んでいた。

スペイン語がほとんどできない私と、英語がほとんどできない彼女は、短いながらも心のこもった会話を交わした。



My life in New York During COVID-19 コロナ禍の中での私のニューヨーク生活

カマーゴ・ニコラス 晃 NY在住

ローザから、彼女の住む建物には、マスクや失業手当をもらう方法もよく知らない人が多いと聞き、ショックを受けた。彼女は、こうしたボランティアグループが、自分たちが生き延びるためにしてくれている活動に、とても感謝していた。私は、ボランティアに参加したことで、身近な人たちにとってのパンデミックの深刻さを痛感した。コミュニティーの絆を作ることで、私は自分の身近な世界が直面している課題に目を向けることができたのである。



家族や、友人、そして隣人たちといった、様々なコミュニティーとのつながりを積極的に求めることで、このパンデミックの中で、私は正気を保つことができただけでなく、目的意識をも持つことができた。様々なアイデンティティーを持つ国際人のひとりとして、パンデミック、そして夏場の抗議活動は、自分が参加するすべてのコミュニティーで行動を起こすことの意義を私に植え付けてくれた。

パンデミックの時期にこの街に住んでいたことで、自分が成長し、多くのことを学んだことを誇りに思う。春も近づき、ワクチン接種などの明るいニュースが報道されているが、私は今回得た教訓を今後も生かしていきたいと考えている。

「人類とコロナウィルスの闘い」のフィナーレは？

宮内はるみ 英国在住

英国はヨーロッパでトップのコロナ感染先進国

同じ英国会員のハワード弘子さんに、「英国のコロナの状況を書いてくださいますか？」と頼まれたあとにPCが壊れました。古かったので買い換えようと思い探したら、どこにも在庫がない、売り切れ状態です。きっと、ロックダウンで在宅勤務やオンラインレクチャーやセミナーが主になってPCの需要が増したのだと思います。

英国は、クリスマス前から始まったロックダウンが続いています。

ピーク時は、一日の感染者が1600人、コロナ関連でなくなった人が12万人、残念ながらこの国はヨーロッパでトップのコロナ感染先進国です。



現場の状態は厳しさを増すばかり

私の職業はNHS(National Health Service)で働く助産師です。

去年3月の第一波の時は、36週以降の妊婦さんたちは、出産に備えて自宅隔離をするということになっていたので、マタニティ病棟ではコロナ陽性者をみることはほとんどありませんでした。第三波になってから、一般病棟は600人のコロナ感染者が入院していて(1月16日の時点)、これは全部の入院患者さんの1/3にあたります。

重症患者さんの数もうなぎ登りで、ICUは満床、普通病棟がコロナ病棟になり、スタッフが取られ、人手不足でみなが疲れて、病欠が増え、慢性の人手不足、という悪循環です。

今回の変異種コロナウィルスの感染力は半端なく、マタニティも妊産婦さんの陽性者がどんどん増えて、私の勤務するハイリスク産前産後病棟にも「コロナ部屋」が出来ました。

シフトのたびにコロナ陽性者のケアをして、バイザー、マスク、ガウン、手袋といった医療従事者が自分と患者さんを守るために身に着ける装具である、PPE (Personal Protective Equipment) も完全ではない状態で、現場で働く医療従事者はいつ感染してもおかしくありません。

自分は自分で守るしかないと痛感

去年3月に義母(93才)がCovid-19に感染して入院しました。一時はもうダメかも知れないという状態だったのですが、奇跡的に回復しました。

私たちは、彼女のフラットから歩いて10分という近所に住んでいるので、自宅隔離をしている義母に食料品や薬を届け、身の回りのことなども手伝う、いわゆるケアバブル*です。

*バブルというのは、同じ屋根の下に住んで一緒に生活している家族や同居人ですが、一緒に住んでいなくても、高齢者・病人・障害者をケアする人はケアバブルとして、会うことができます。

義母がCovidで入院した後、すぐに主人と子供たちも検査をして、陰性と判明し、ほっとしました。私は週2回ホームキットで検査してずっと陰性、それに血液検査も受けて、コロナの抗体がまったくないことがわかりました。

普段はインフルエンザの予防接種も受けず、それでも風邪ひとつひかないという、免疫力の強さには自信がある私ですが、今回はそれだけではすまない危機感を感じ、自分は自分で守るしかないと痛感し、ワクチンを受けることにしました。

MEDICAL TEAM

STOP COVID-19
CoronaVirus



「人類とコロナウィルスの闘い」のフィナーレは？

宮内はるみ 英国在住

ロックダウンとワクチンの成果か？

英国は去年の暮れから、ケアホームの住民と80歳以上の高齢者、そしてフロントラインで働く医療従事者を優先に、コロナ予防接種のプログラムが始まりました。新年からは既往症のある人+55歳以上の人たちへの接種も始まり、乳ガン治療中の40代の友達にも予約がきました。

2月20日の時点で、第一回目の接種を受けた人は17.5ミリオン(国民大人の32.7%)。

「Life back to normal」7月までに！

予防接種を受けた人たちによると、個人差はありますが、注射した部位が痛い、腫れる、軽い発熱、倦怠感、風邪症状、などの反応があるようです。ロックダウンとワクチンの成果があって、感染者数、死亡者数が収まってきています。3月8日から、少しずつロックダウンが緩和されることになりました。まずは学校が再開され、野外で友達2人と会っておしゃべりが出来るようになります。

3月29日からは6人までのグループ、または2家族が会えるようになり、フットボール、ゴルフ、テニスといった野外スポーツが出来るようになります。4月12日からはデパート、洋品店、美容院やジムが開きます。5月17日からパブやレストランの中で飲食が可能になり、結婚式のゲストが30人まで許可され、運動場やコンサート会場が再開されます。(あくまでも用心しながらということ)

ボリス ジョンソン氏は6月21日以降、すべての規制をなくし、感染率の上昇がなければ、7月には「Life back to normal」という目標を掲げました。パンデミックの1年間、「人類とコロナウィルスの闘い」というまるでフィクションの映画のような世界に住んできた私たち。

映画のフィナーレが、ハッピーエンディングになるかどうかは、私たち次第ではないでしょうか。



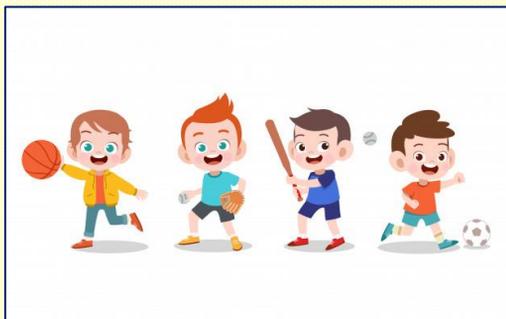
Roadmap out of lockdown

ロックダウンの緩和に向けたロードマップ

STEP01



STEP02



STEP03



STEP04



宮内はるみ 英国在住

静岡市出身、在英35年。英国人の夫、4人の子供たちとロンドン郊外で暮らす。UCL(ユニバーシティーカレッジロンドン)で、看護と助産を学び、現在はNHS(ナショナルヘルスサービス)の病院に、助産師として勤務。近所の日本人妊婦さんや育児中のママたちを集めて、お茶会、ベビーマッサージクラスを開催。日本人助産師の仲間たちと一緒に、おしゃべり相談会を開催。

コロナ禍のベルリンに暮らして

ノリス恵美 (のりす・えみ) ドイツ・ベルリン在住



1978年からドイツ・ベルリン市に住んでいます。英国人の夫と2人の息子（すでに独立）がいます。1982年から『女の会 ベルリン』会員。国際結婚を考える会とのお付き合いもその時からです。ベルリンの壁崩壊（1989年）以降は観光業をしていました。

人々の心に届いたメルケル首相発言

ドイツのコロナ禍の第1波（2020年3月、4月）では、人々は初めてのロックダウン経験に戸惑いがちではありましたが、決められたことを真面目に守る国民性を発揮して、うまく乗り切った感があります。小麦粉、パスタ類、乾燥イースト菌、トイレトペーパーや消毒剤、マスクなどが店頭から暫くの間姿を消していましたが、多分ヨーロッパ中が同じような状況ではなかったかと思います。私自身は生活用品に不自由は一切感じませんでした。毎日コロナ罹患者数や死亡数の国際統計を見つめては、他のヨーロッパ諸国に比してドイツは感染者死亡率が圧倒的に低いので、また連邦政府が色々と援助金を出す決定をしたこともあって、

「ドイツって立派よね～」とか「国家が私たちを守ろうとしているわ～」などと感じ入っていました。メルケル首相の発言は、人々に緊急時に困難を分かち合い、信頼し合おうという気持ちを起こさせるものでした。これはとても大切なことだったと思います。



コロナ禍のベルリンに暮らして

ノリス恵美 (のりす・えみ) ドイツ・ベルリン在住

コロナに罹患しないことが義務

私的には観光業が総崩れとなりましたが、そもそもすでに年金生活者であり、観光業は趣味でやっているようなものでしたから、援助金を申請するほどの経済問題ではありません。実にヒマですから借りている家庭菜園の手入れをする毎日。粛々とルールを守って暮らし、コロナに罹患しないことが義務だと思って暮らしました。

それでも3月末から週に1度、2時間程度の森の散策を友人と2人で始めました。これは規制が緩むに従って次第に参加希望者が増え、9月には最高9名にまでなりました。心身の健康のために必要だったのでしょう。11月以降は規制が厳しくなったので、参加人数はまた2名に戻っています。また私は高齢の独居の日本女性のためのお買い物と訪問をするボランティア活動を週に1回しているのですが、これも夏以降再開し現在に至っています。リスクはあるのですが、やはり必要なことです。



気の緩みから徐々に増え、パンデミーに

6月には感染者が減ったので、このチャンスを逃すものかと私たち夫婦と次男とそのパートナーの4人で南ドイツとチロル地方に12日間滞在しました。夫は8月に仲間と一緒にオーストリアに2週間のサイクリング旅行にも行っています。私たちは罹患することなく現在に至っていますが、この辺りから全体的に気の緩みが出てきたのでしょうか。8月半ばあたりから徐々に罹患者数が増え、10月からは激増し、この第2波ではドイツの感染者死亡率も他のヨーロッパ諸国のそれと変わらなくなってきました。自治意識の高い各州に中央政府が押し切られ、介護施設の高齢者を守る政策が大幅に遅れた、第2波対策を取ることが遅れた等が原因に挙げられています。11月からは規制が強化され、さらに12月半ばからはロックダウン状態がずっと続いてきました。

コロナ禍のベルリンに暮らして

ノリス恵美（のりす・えみ）ドイツ・ベルリン在住

1月には死者数が千名を超える日が数日あり、どうなることかと案じられましたがようやく漸次減少傾向となり、3月からは状況に応じて徐々に規制が緩和される予定です。12月末にごく健康だった知り合いの男性（74歳）が罹患し、突然亡くなったことは大きなショックでした。身近にこうしたことが起きて、初めてパンデミーの恐怖が現実のものとなります。

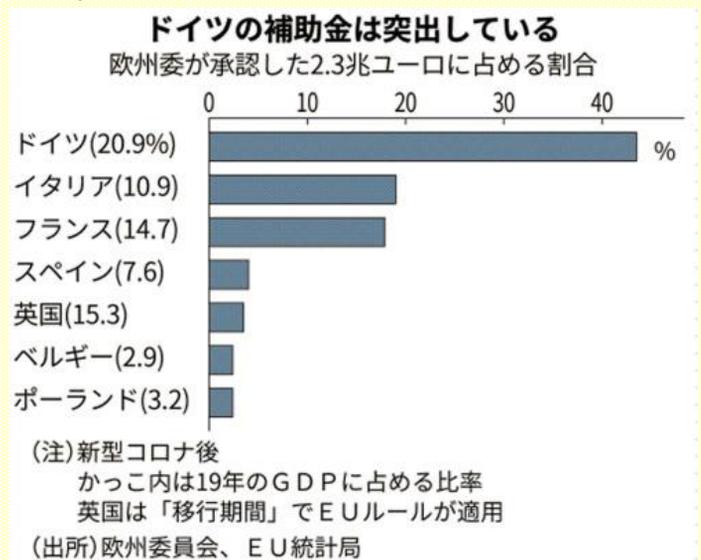
マスク無料配布と企業への援助金



12月には60歳以上の人と糖尿などの持病を持つ人への高性能のマスク3枚の無料配布が始まり、2月には健康保険会社を經由して連邦政府からマスクのクーポン券（6枚ずつ2回、自己負担は1回につき2ユーロ）が郵送されてきました。12月半ばからは公共交通機関や店舗などでは高性能なマスクの着用が義務づけられたので、これも老人にはありがたい施策でした。

援助金については詳しくはわかりませんが、ある小さなコンサルタント有限会社を経営している人の話によると、現在までに2回、合計1万4千ユーロ程度の援助金を受けたそうです。申請は税理士を通して行い、過去の業績や必要経費等を明らかにせねばならず、決して簡単ではなかったとのこと。

この2回分の援助金は返却の必要がなく、大変ありがたかった、しかし業務が皆無な間のオフィスの家賃等を完全にカバーできるほどではなく、やりくりが苦しいのは何処も同様、幸い仕事の依頼が増加してきているので、3回目の援助金（返却が条件）の申請はせずつみそうだ、と語ってくれました。



[新型コロナ: ドイツ、企業向け補助金突出 EU全体の4割強: 日本経済新聞 \(nikkei.com\)](#)

コロナ禍のベルリンに暮らして

ノリス恵美 (のりす・えみ) ドイツ・ベルリン在住

施策はドイツ「住民」に。一方ネオナチ極右に注視を。

また最近はワクチン接種の招待を受ける高齢の知り合いが増えつつあります。接種を行う会場はベルリン内に6ヶ所ほどあり、予約をしますが、自宅からの往復に無料のタクシー利用が可能だと聞きました。なんと高齢者に手厚いことよ、と感心するばかりです。こうした施策は「ドイツ国民」ではなく「住民」を当然に対象としていることを強調しておきます。

私の一番の気がかりはドイツ統一以来の様々な不安を持つ、あるいは難民政策に不満な人々やネオナチ、その他のポピュリストが反コロナ政策の旗印のもとに結集していることです。数千人、時には数万人規模の集会在たびたび開かれています。ちょっと想像を絶します。「ドイツに住んでいてよかったわ〜」と素直に感じてはいるのですが、のんき過ぎますね。

極右の動きにはもっともっと敏感になるべきです。対決せねばならぬ場面もあるかもしれません。



[ドイツで「反コロナ」デモ 新型コロナウイルス規制などに抗議、300人逮捕 - BBCニュース](#)

コロナ渦中のスイス -だれが、どこまで自由を奪っているの？-

S.K スイス在住

言葉も価値観も異なる州で作られたスイスの不協和音

ウィリアムテルがなぜ息子の頭上のリンゴを射落とすことになったかご存じですか。スイス建国伝説によれば、現在の連邦中央部にあたる地方の悪代官ゲスラーが杭の上に自分の帽子をかぶせて「オマエらここを通る時コレにあいさつせい」とお触れを出しました。ハプスブルグ勢力への服従強要を象徴したエピソード。テルが無視して通るのをとがめて下した罰がリンゴ射ちだったのです。

そもそも王、皇帝などの支配勢力の辺境地域で反抗する三つの州が自治を掲げて作った国がスイスだそうです。



ドイツ系フランス系イタリア系の言葉も価値観も異なる村や町が加わって同盟州が増え、州を束ねる仕組みを連邦とした700余年の歴史の延長線上に、今現在の伝染病対策の不協和音があるのが見える気がします。

復活したベルリンの壁？ 園芸店の開店許可から

コロナによる閉鎖策第一期は2020年3月17日から4月末まで続き、その後段階的に解かれました。商店、レストランはもとより学校、スポーツや文化施設もすべて閉鎖、ドイツとの国境にはフェンスまで設置され、まるで復活したベルリンの壁。戦争を知らない者にとって生まれて初めての日常の喪失でした。

スーパーマーケットの入り口は一家所に絞られ、店員が立って人数制限していましたが、ものものしさの割には入店を待たされることは稀でした。ところがその頃近くの森に入ると、まるで町中の人々が森林浴に来たかのように、スーパーマーケットより密な混雑ぶりにびっくり。珍しくぽかぽか陽気の続く4月でした。

コロナ渦中のスイス -だれが、どこまで自由を奪っているの？-

S.K スイス在住



閉まったレストランのテラスで日光浴する人達

チューリッヒやルツェルンの湖沿いの並木道には陽気に誘われた人出防止のため数キロに渡って柵を巡らせました。それでもくぐり抜けて侵入する人が後を絶たず、日を追うごとに警官を増員するイタチごっこになりました。水仙やプリムラが咲き終わり、庭仕事をしたというわたしを含む国民の不満爆発の直前に安全弁を開いた格好で、まず園芸店が4月末開店許可になりました。

マスクはまだ品不足で購入不可。調達が遅れた言い訳か、買いだめ防止のためか、記者会見で厚生大臣と対策本部長が並んで「マスクの効果は疑問」と発言して物議をかもしました。うちには以前の鳥インフルエンザの時から買い置きマスクがあったので、それを着けてさっそく行きつけの大型園芸店へ。入り口で入店者数制限のための札を取り、他の客に接近しないよう恐る恐るゼラニウムやベゴニアを選んで2メートル間隔の行列に並び、現金お断りと書かれたレジでカードで支払って入店札を返す、それだけの事でも解放された喜びがありました。

同じ頃美容院も再開し、白髪からも解放されてやれやれ。5月中旬二か月ぶりに学校再開、レストランもテーブルの間隔を最初は2m、その後1.5mにして営業。国境が休暇シーズン直前の6月中旬から開かれ、抱き合って喜ぶおばあちゃんと孫の姿がテレビに映りました。夏にはほぼ平常の生活に戻ってみんなマスクもせずこのまま収束のつもりで居たのです。

毎年行っているクロアチアの海辺の町では観光客が2割がた少なく、レストランでの順番待ちがなくて快適な夏休みを過ごせました。



コロナ渦中のスイス -だれが、どこまで自由を奪っているの？-

S.K スイス在住

二年前から予約していた10月の中東巡りのクルーズは、ダイヤモンドプリンセスの例を見て予測していた通り催行中止になり、代わりに9月に近場へ旅行。普段はアジアからの観光客に占拠されているインスブルック、ザルツブルグ、ローテンブルグを巡り、有名なノイシュバンシュタイン城もゆったり見物。日本のGO・TOのような割引はないどころか、ホテルによっては料金は同じで掃除抜き、タオル交換なし、レストランはメニューの限定、早じまいなど不都合もありましたが、落ち着いて観光できる前代未聞のチャンスでした。

州まかせで分かりにくい規制

秋の深まりとともに感染者数は爆発的に増えだし、近しい人の中にも陽性の人が出て事態は逆転。それでもなおスイス人のマスク不信は根強く、アジア人のわたしがマスク姿で歩けば周囲の人がぎょっとして道を空けてくれる、という妙な効果がありました。事態の深刻度と共にマスク着用義務の範囲が電車やバスの中、続いて建物内、やがて街じゅうへと拡大。クリスマス直前になって春よりはゆるい第二期閉鎖策が発表になりました。

ところが細かいところは州に決定を任せるとのことで、いったい何がダメで何が許されているのか分かりにくい状況になりました。ファッションブティックの系列店がとなりの州は営業中、こちらは閉店。同じ商店街でも靴屋は閉まって靴下屋は開いているという具合。ちょうど歳末バーゲンの時期だったので、開いているチューリッヒ州のショッピングセンターに周辺の州からも買い物客が殺到して、超密状態になる騒動がありました。



スーパーマーケットの禁制品のコーナー

コロナ渦中のスイス -だれが、どこまで自由を奪っていいの？-

S.K スイス在住

年が明けて1月18日からは統一が図られ、すでに年末から閉鎖になっていたレストランやスポーツ施設、劇場に加え商店も全国で閉まることになりました。ただし、食料品、医薬品、文房具、下着や靴下などいわゆる日常生活必需品は販売して良いのです。いつも行くスーパーマーケットでは、禁制品のコーナーにテープを張り巡らし「販売不可」の紙が貼ってあります。手を伸ばせば取れるので、試しにタオルを手にとって読み取り機のセンサーをバーコードに当てると、ちゃんと購入登録できました。そのまま持って帰れば万引きじゃないけど違法行為。防犯カメラで見られていたら警察に通報される？当たり前行為と犯罪がこんなに近くて紛らわしいのは人生初の経験です。

「よそ者のさしずは受けん」と叫ぶシーンが目につく

人と人との接点をゼロにするわけにはいきません。ではどこまで活動の自由を束縛するか、だれが決めるのでしょうか。伝染病法により連邦に全権限があるのかと思えば、厚生大臣の方針発表の翌日には州がこぞって異議の申し立て。一般市民は右往左往の末、各自自己責任で行動すると腹をくくった感じです。今回の閉鎖策では学校は除外されました。けれども個人の判断で子供を学校に行かせない保護者が居ます。これは違法行為ですが、逮捕者が出たとは聞きません。

三度の飯よりカーニバルというバーゼル人のグループが禁止令を破って仮装で市中を練り歩き、警官と押し問答する場面がニュースになりました。こちらも逮捕も罰金もなし。



コロナ渦中のスイス -だれが、どこまで自由を奪っていいの？-

S.K スイス在住

レストランは閉鎖だけどテイクアウトはOK。それでは買った食べ物を店のテラスに座り込んでスキー客が食べるのは違法、合法？「ゲレンデのレストランもテラスを閉鎖せよ」という厚生大臣の指示に盾ついて、スイス建国の起源となった三つの州を中心とする山間部の州が営業許可を続けています。シーズンを逃せば破綻するスキー村の頑固さはご先祖様のテル譲り。

雪焼けした山男達が口々に「よそ者のさしずは受けん」と叫ぶシーンが目に見えよう、連邦と州との駆け引きが注目を浴びています

スイスらしい混沌の中で暮らすわたしたち

窮状打開の鍵はワクチンですが、1月中旬から接種の申し込みがネットで可能になり、わたしもさっそく登録。一ヶ月半経った今もワクチン不足は深刻で、順番のお知らせを歯がゆい思いで待っています。ところが先日発表されたアンケート結果では、ワクチンを希望する人は全体の49%に過ぎないとのこと。連邦は接種料金の本人負担をゼロにして奨励していますが、笛吹けど・・・の手前の段階でワクチン懐疑派の声を尊重して、笛がラッパにならないキャンペーンのやり方を模索中。

「おかみ」のお触れへのアレルギー体質が遺伝子に刻まれた国民と、25%の外国人が共生している国ですから、不満の爆発を回避しつつ一貫性のある感染対策を進めるのは不可能なのかもしれません。小さい爆発に手を焼きながら徹底しない対策を連邦と各州・各自治体が知恵を絞って講じている、いかにもスイスらしい混沌の中にわたしたちは暮らしています。

「欲シガリマセン勝ツマデハ」と一丸になって、あらぬ方向に直進するよりはいいでしょうか。



朴沙羅 フィンランド在住



京都出身の日韓ダブル・重国籍。2020年2月よりフィンランドに移住。日本人男性との間に2人の子がいる。

日本でも韓国でもない国で暮らしたい、そしてフィンランドへ。

私は京都生まれ京都市育ち、日韓ダブル重国籍の大学教員です。2011年に日本国籍を持つ男性と結婚し、2014年と2017年に子どもを出産しました。日本でつつがなく生きていこうと思わなくもなかったのですが、日本でも韓国でもない国に暮らしたいという気持ちを抑えられず、海外の大学の仕事に応募すること5年目になった2019年の秋、ヘルシンキ大学文学部の講師として採用が決定しました。

私は2020年2月に、子どもたちは3月の半ばに、フィンランドに行くことになりました。ところが、3月16日からフィンランド政府は緊急事態宣言を発令しました。子どもたちがヘルシンキに到着したのはちょうどその日の午後でした。

緊急事態宣言を発したとはいえ、フィンランドで言われているロックダウンは、他のヨーロッパ諸国と比較するととても緩やかなものでした。10人以上の集会が禁止され、大人は可能な限りリモートワークに、小学校3年生（日本でいうところの小学校4年生）以上はオンライン授業に

切り替え（ただし給食は実施されていきました）、飲食店は休業を余儀なくされ、公共施設が閉鎖されましたが、3月末にフィンランド南部のウーシマー地域（首都圏を含む）と他地域との交通が一部規制されるまで、個々人の移動は制限されませんでした。



朴沙羅 フィンランド在住

手厚い保育の中で子どもたちはたくましく成長



そんな状態でいきなり始まったヘルシンキでの生活でしたが、子どもたちはたくましく成長してくれました。上の子は6歳、下の子は3歳で、毎日バスに乗って職場近くの植物園の中にある小さい保育園に通いました。緊急事態宣言発令中は、登園を自粛していた家庭も多かったため、園児よりたくさんいらっしゃった先生がたに、子どもたちを手厚く保育していただきました。下の子のためにわざわざ日本語のできる先生が来てくださり、上の子はマンツーマンでフィンランド語を教わりました。園長先生と隣のクラスにいる日本人の先生は、毎日2人の様子を見にきてくださっていました。

6歳の8月から始まる就学前教育が、その小さな保育園では開講されないことから、夏からは自宅近くのやや大きい保育園に移らざるを得ませんでした。今でもときどき、子どもたちと以前通っていた保育園の話を楽しみます。



日本とフィンランドの出入国・自主隔離

今のところ、働き始めてからほぼ1年、リモートワークしかしておらず、まだ新しい仕事を始めた気がしていません。まさか移住とほぼ同時にこんなことになるなんて、と思いつつ、なかなかできない体験をしていると思うとワクワクします。

朴沙羅 フィンランド在住

と言いつつ、この1年間は日本とフィンランドとの行き来に骨が折れました。私も子どもたちも日本国籍を持ち、フィンランドの滞在許可があるため、日本とフィンランドへの入国は可能です。行き来ができるだけ、恵まれていると言えるでしょう（飛行機自体が飛ばない時もありますが）。

しかし、私一人だけで行き来するならまだしも、日本入国後に子どもたちと2週間、自主隔離するのは辛いものです。フィンランド政府は新規感染者数に応じて入国制限をかけたり解除したりするので、日本が制限対象に入っていない時であれば、自主隔離は求められません。また、入国時と入国72時間後の2回、PCR検査を受けて陰性であれば、自主隔離をやめることができます。この基準値自体について議論の余地はあるでしょうが、基準とその根拠が明確なのは助かります。

新型コロナは国籍にかかわらず感染するし、外国人だから危険というわけでもないのだから、国籍ではなく居住実態で入国の可否を決めるべきでしょう。日本に帰ってくる人ができる人の範囲が狭く、どのようになればその範囲が変わるのが曖昧なのは、いかにも日本の出入国管理だと感じます。

子どもたちに、ルーツや民族を超えた発想が芽生えたら。

しかし、日本の緩やかな新型コロナ対策は、ある意味で善いものに見えます。これほど人口密度も高齢化率も高い国で、強制力を伴わない政策で、この程度の感染者数で済んでいるというのは、驚くべきことではないでしょうか。それはおそらく、政府の主導というよりは、現場の必死の努力によるものでしょう。そして、その努力によって何とかなってきたがゆえに、トップレベルで解決されるべき問題（例えば、特措法で新型コロナ感染者を受け入れる医療期間を増やすなど）を先送りにできてしまうのでしょうか。このような民間努力は、政府は可能な限り個人の生活に干渉しない（その代わり個人が干渉し合う）戦後日本社会の伝統に則っているかのようです。

私が日韓どちらでもない国に住みたいと思った理由の1つは、子どもたちが自分のルーツに、少なくとも私と同じようには、悩まないでほしいからです。フィンランドで子どもたちがどのように扱われ、子どもたちがルーツや民族についてどんな考えを持つのか、私にはわかりません。私には思いつかないような発想で、別の課題に取り組んでほしいと願っています。



特集の編集を終えて～編集メンバーの感想

<みなさまからのご意見、ご感想もお待ちしています>

会報第3号に寄せられた記事を読んで興味深かったのは、テレビのニュースなどでは伝わってこない各国の住民目線でのコロナ禍の様子が伝わってくるところでした。その国々の政府の対応、政府に対する国民の姿勢や国民性など、様々な角度から国による違いを感じとることができました。JAIFの会報は、信頼できる会員たちのさまざまな国での個人的な経験や声を、身近なものとして聞くことができる貴重なものだと思います。 (山下)

去年の1月から続くコロナの世界的な感染、毎日のニュースはコロナ、コロナで明け暮れて、いつになっても、収束の気配をみせません。毎日コロナ感染を心配しながら、生きていくのも精神的に疲れました。そんな中、3号は日本、世界に在住するJAIFの会員、関係者に世界各国のコロナ事情やご自分に起こっている影響などを書いて頂きました。コロナで日本でも分断が起きています。職を失うことなく、在宅ワークができる人とどんなに危険でも毎日出勤し、現場で働かなければならない人、職を失った人、一方、株価は上がり、持てる者と持たざる者の差が益々広がっています。コロナ後の世界はどんな世界が待っているのか、予想がつきません。 (小暮)

グローバル化の時代、ある国のある街から、瞬く間に地球の隅から隅まで拡散されたCovid-19。南半球、北半球からJAIFの会報のために寄せられたコロナの日々の体験談、それぞれの国のコロナウイルスの対処に、国民性が顕著に表れていたり、あるいは国が抱えている人種問題や、政治的な問題などもからみあっているようだ。コロナウイルスに感染し、医療機関で治療を受けることも出来ず、不安な日々を送ったり、それぞれの国での出入国の厳しい規制で、家族が何か月も離れて暮らさなくてはならなかったり、タイミング悪く里帰りしたことで、移住先の国に戻れなくなったり等の人たちと比べたら、日常生活のささやかな自由行動を奪われたことへの不満などとは、比べられない。新聞やテレビなどでは報道されてない部分を知ることができた。 (ハワード)

今回寄せられた記事を読んで初めてわかったことが沢山あった。世界中が同じ苦しみの中にあったということ。そして一人一人が貴重な経験をしていて、そのような生きた体験はインターネットやマスメディアからはなかなか知ることが出来なかった内容でもあるということ。さらに国際家庭にとって海外旅行が出来なくなるということは、単に旅行に行けなくなってしまうという次元ではなく母国に帰れなくなったり母国にいる家族や親戚との別離という深刻な状況なのだということ。いつ戻ってくるかわからない日常だが、いつかマスクを外して深呼吸できる日が来ることを信じて、今出来ることに感謝して生活したいと改めて思わされた。 (コールマン)

実体験ほど、真実に迫る内容はないのではないかと思わせてくれた特集だった。罹患してしまった息子に会いに行けない苦しさはあったが、こうして寄稿してくれたことで大きく成長してくれた彼を知り心から誇りに思う。 (カマーゴ)

『カルチャーショック』はマイナスからプラス面に向う

マルソー中出眞理子



マルソー中出眞理子さんの作品

「国際結婚を考える会」京都発足当時の会員。2020年に再会員となる。1977年、アメリカ人（現在の夫）と結婚後アメリカ・マサチューセッツ、バージニア、デラウェア、ハワイ、フィラデルフィア州を転々とし、2006年ニュージーランドへ移住。2020年日本永住帰国。京都市在住

半世紀23回の引っ越しを体験！

1977年、京都の小さな離れを借りて夫と二人の結婚生活が始まった。夫はアメリカ人、当時は受験勉強中。79年に息子、83年に娘が生まれ、直後渡米。以来、主な引っ越しは23回。日本・アメリカ・ニュージーランド(以下NZ)。米国内でも5州をウロウロ。この引っ越し回数を見込まれたか、会報担当の小暮さんにこれまでの経験を共有できないかとお話を頂いた。

さて、何が共有できるか、と考えてもこのかれこれ半世紀はあまりにも長く、あまりにも多くのことがあり、個人的すぎることも多い。夫は日本文学者、私は日本語講師、二人ともずっと大学勤めをしてきた。そして、まずそうなるための道のりまでに子連れ引っ越し6回。その後、転職、研究休暇の度に各2回は引っ越す。引っ越しのたびについて回る片付け、家探し、そして避けられないのがカルチャー・ショック。小口の場合もあれば大口ショックもある。日本からアメリカに移った時、当時5歳の息子のカルチャー・ショックについて「素顔の国際結婚」に投稿した。子ども達は今、逞しくそれぞれの道を歩んでいる。自分のカルチャー・ショックどころではなかった。それで、そうだ！今回は私のカルチャー・ショックについて書いて見ようと思った。「直近」の経験は米国からNZ移住時。大口ショックだった。

NZへの移住、同じ英語圏だが違う文化圏なのだと実感

2006年、約1/4世紀住んだ米国を離れ、NZに移住。一応国について調べもしたし、同じ英語圏だしと呑気に構えての二人だけの移住。夫は1年先に移り、仕事を始めていた。私は自分の仕事を片付け、後任探しと引き渡しのため一年単身居残り。

国際引っ越しを経験した方々と同じく家族の家財道具整理、家の売却、家族生活を送った家を空にし、荷物発送。引っ越しと言ってもそれに関連する作業、費やされる時間や精神的負担は並大抵のことではない。でも、そんな過程を経ても、新しい国に向かう期待に胸膨らませ、彼の地で新しい生活がスムーズに始まると思っていた。

アメリカを出発したときは初夏。さあ、これからいい季節と全ての生命がエネルギーに活動を始めていた。一方NZはこれから冬。冬カラーで覆われ始めていた。到着後は厳しい荷物検査が待っていた。スーツケースもカバンも全て隅から隅までチェック。友人が持たせてくれた北海道産のサーモンチップス3袋は全て没収。日本製鮭製品は不可だという。

落胆した私の顔を見て検査官は「ごめんね、私のせいじゃないからね」という。NZへの食品持ち込みはとても厳しい。丹波黒豆を持ち帰ったときは袋入り、乾燥食品にも関わらず、豆は植えると芽が出るので不可。なんと言っても丹波黒豆。私としてはこれが没収なんて諦めきれない。どうするかを選択肢は1 送り返す、2 破棄、3 発芽しないように有料熱風処理。悔しさ所以で熱風処理後持ち帰ることにした。しかし、黒豆は熱風処理もなんのその、NZでお正月料理として立派に役割達成してくれた。

キャンプ用品も靴もチェックされる。外来の虫・雑菌などを国に持ち込んでもらっては自然形態破壊に繋がるからだ。NZのコロナ対策の徹底ぶりを見ればなんとなくわかってもらえると思うが、初めての入国時は「えー、なんでー?」。手荷物検査は日本もアメリカも結構緩い。だから私の中の基準はそこに設定されていた。でも、これも経験、理解すればなんてことはない。別の文化圏なのだから文句を言っても始まらない。

発散口がなく八つ当たり、よく耐えてくれた夫に感謝。

NZの冬はマイルドという先入観が、到着してから異常なほど私を寒く感じさせた。理由は湿気。雨季かと思うような雨が1日に何度も降る。おまけに冬物が届いていない。仮住まいの家は古くて狭い。床下から湿気がジトー、カーテンは外からの空気でユラユラ、着込めるだけ着込んでガスストーブの前にへばりつく。何だか北陸での子ども時代を思い出す。晴れる度に外を歩いてみる。汚い。ゴミが目立つ。あ〜、私は何を捨ててここへきたのだろう。初夏から冬への移動。湿気が堪える。憂鬱。春はまだかまだかと待つ。ところが春はまだずっと先。湿気と寒さはガラガラと継続。陶芸仲間は眞理子に天気の話をするなど冗談を言う。

「え?夏はいつなの?暑くなるのよね?」「いやあ、年によっては12月も寒いよ。雨続きの年もあるよ」。慰めにもならない。例え外が零下でもセントラルヒーティング、米国郊外の住環境と違う。今考えるとなんて情けない。異文化遭遇だよ!毎日文句の発散口がないから夫に八つ当たり。よく耐えてくれた。

とうとうNZ流が私のニューノーマルになった。

もちろんお天気だけが理由ではない。大学内システムもアカデミックスタンダードも英語も違う。何をどうしたらいいか、何がその文化で通常・普通なのか、何がその文化ではふさわしくて、ふさわしくないかなどという判断の欠如からおこる精神的、肉体的な障害。怒り、イライラ、不安、孤立感、嫌悪感、ステレオタイプ的な物の見方。いっぱい失敗、失言をした。でも、これは夫と二人で選んだ結果に始まるプロセスの一部だった。誰のせいでもないのに「違う、すべてが違う、帰りた〜い、こんなはずじゃなかった、約束が違う〜、判断間違ったあ！」と文句たらたら。

あんた子どもか！自分を一喝した。さて、カルチャーショックという言葉、調べるとまだ使われ始めて半世紀。私より若い言葉。人の文化間の行き来が盛んになり、人類学者の造語だそう。しかし、カルチャーショックはマイナス面だけでなくプラス面に向うのだと再確認する。カルチャーショックはプロセスであって結果ではない。得られる結果とはもっと広い視野で物事が考えられるようになる事、自分自身をもっと知り、想像性が持てるようになる事。そして知恵がつき、少し賢くなる。NZはもう私の第3の母国のようなもの。NZに到着したあの時から徐々に慣れ、友人も増え、地域に受け入れられ、NZを誇りに思い始め、NZ流が私のニューノーマルになった。

昨年度日本に帰国。新たなカルチャー・ショックは少しあるものの、流石第一母国。今のところ、日常生活を楽しみ、これから何ができるか模索中。ソフトランディングでよかった。人生最後の引越し（たぶん）も無事終わられてよかった。

参考文献：[Dr. Carmen Guanipa-Culture Shock](#)

Dept. of Counseling and School Psychology, San Diego State University

《マルソー中出眞理子ギャラリー | 愛すべきNZ》



Mt. Cook国立公園

アーサーズパス国立公園



クリスマスのころ咲く、ポフトカワという花



南島の最南端スロープ・ポイント

在外邦人の増加は顕著

現在、政府統計の公式サイトで、最新の在外邦人の動向を数字で確認すると（e-Stat <政府統計の総合窓口>のサイトより<https://www.e-stat.go.jp/>）、令和元年（2019年）<公開：2020年11月5日>の時点で、在外邦人の総数はおよそ140万人（1,410,356）、うち長期滞在者（3か月以上を超える滞在）90万人（891,473）、永住者（外国に永住許可の資格を持って滞在する邦人）52万人（518,883）という事が閲覧できます。この数は2014年統計の、在外邦人130万人（1,290,175）、うち永住者数43万人（436,488）という数から過去5年間で永住在外邦人の数はおよそ8万人も増えていることが確認できます。

複数国籍容認国に永住している邦人は全体の92%

この永住者の地域別内訳は、Ⅰアジア3万7千人（37,553）、Ⅱ大洋州7万3千人（72,977）、Ⅲ北米25万7千人（257,335）、Ⅳ中米4千人（3,888）、Ⅴ南米7万人（69,948）、Ⅵ西欧7万2千人（72,813）、Ⅶ東欧・旧ソ連1600人（1,621）、Ⅷ中東1800人（1,885）、Ⅸアフリカ863人、Ⅹ南極0 という数字で、複数国籍容認国の多い大洋州、北米、中米、南米、西欧の地域に永住している邦人の数は、47万人（476,961）と、なんと在外永住邦人の総数の92%に達しています。

永住在外邦人の複数国籍容認国での安定生活への障壁

想像してみてください。これだけ多くの人たちが、複数国籍容認社会の中で就職の際、その国の国民やほかの容認国からの移住者との競争で、その在住国の国籍が取れないという大きなハンディを負っているのです。もちろんこの中には、国際結婚から生まれた合法的な複数国籍者も含まれますし、すでに外国籍を取得しているが日本の戸籍には国籍喪失届を出していないので統計上は永住在外邦人として加算されている場合もあると思われます。

しかし自分の意志で外国籍を取得した人で、海外で日本の存在感を示す顔となり日本文化紹介のために多くの役割を担っている人たちに待っているのは、有無を言わせない日本国籍の自動喪失条項です。

一部では、外国籍を取得しても日本の戸籍に届出さえしなければ国籍は喪失しないとか、黙っていればグレーゾーンで大丈夫などと誤った情報がネット上でも多く見られます。しかしこれは、大変危険な違法行為です。あとで長く日本に帰国しなければならぬ状況になった時に、思ってもみなかった法律的な困難に陥ることになります。

『国籍はく奪条項違憲訴訟』の裁判結果と今後の国籍法改正要望の活動について

トルン紀美子

作成：国籍はく奪条項違憲訴訟原告ら弁護団 2020年11月

国籍はく奪条項違憲訴訟

(国籍法11条1項違憲訴訟)

2021年1月21日
東京地裁判決
(予定)

国籍法11条1項「日本国民は、自己の志望によつて外国の国籍を取得したときは、日本の国籍を失う。」(戦前の旧国籍法の規定がそのまま残されたもの。)

原告はどんな人？
欧州在住の30代～80代、8名。
外国籍を取得した(取得したい)が
日本国籍を離脱する意思はない人。

個人にとって不幸、不利益

居住国の国籍がないと困ること

就労の機会が限られる。
社会保障、相続などで不利。
参政権がなく在留資格が不安定。
国際結婚家族の場合、家族間で国籍が異なり家族離散の不安がある。
介護に親を呼び寄せられない。等々

日本の国籍がないと困ること

アイデンティティ、祖国とのつながりが断たれる。親の介護に帰国できない。
将来帰国できなくなる。等々

(弁護団アンケートに寄せられた声の一部
(回答497名))

日本にとって大きな損失

(例) オーストラリアが同様の規定を廃止したときの議論

「市民権を取得しようとする国で居住・労働することを希望するオーストラリア市民にとって、オーストラリア市民権を失う恐怖にさらされ続けることは、その国でオーストラリアのプレゼンスを拡大することについて、不必要な障害となっている。」

国籍法11条1項によって
日本国籍を失った人
カズオ イシグロ氏
中村修二氏
南部陽一郎氏 他
海外でプレゼンスを
示せない!

今や世界の75%以上の国が、国籍法11条1項と同様の制度を廃止しています。

複数国籍の日本人は90万人以上。
どんどん増えています。

国籍法11条1項は憲法違反

外国籍を取得したからといって、なぜ日本国籍をはく奪するの？
日本国籍は主権者としての地位、基本的人権保障の土台(最高裁大法廷判決)であり、はく奪は許されない。(憲法22条2項、13条)

外国人が日本国籍を取得して複数国籍が認められるのに、なぜ日本人が外国籍とったら複数国籍になれないの？

国籍法は出生による複数国籍など多くの場合で複数国籍の解消を本人の意思に委ねている。それらとの不均衡は、平等原則に違反する。(憲法14条1項違反)

参考資料

ちくま新書「二重国籍と日本」(第5、7章)

訴訟支援者ネットワークHP <http://yumejitsu.net/>

希望之図



『日本国籍の自動喪失条項は憲法違反』を訴え続ける

2018年3月に提訴された国籍はく奪条項違憲訴訟

(<http://yumejitsu.net/>) は、そのような海外に永住している日本人で生活安定のためには在住国の国籍も必要だが、日本国籍自動喪失の条項により日本国籍を失いたくないのに失ってしまった人、またこれから外国籍を取得する必要があるという原告8人が、国籍法11条1項の『国籍自動喪失条項は憲法に違反する』と国を訴えている裁判です。

2021年1月21日に一審の東京地裁で出された判決結果は、残念ながら敗訴でした。弁護団のお話では、裁判が始まったころの公判では、裁判官もそれほど興味を見せずすぐに結審されそうな感触だったそうですが、途中で交代した裁判官は原告の意見陳述に興味深く聞いていたそうで、ときには原告の話にかなり心を動かされた様子もあったとのことでした。また、最後の公判から結審までの時間が通常よりも長くかかったことで勝訴への期待はますます高まっていたので、国側の木で鼻をくくったような反論をそのまま採用したような判決内容は、原告代表の野川さんの言葉を借りれば「まるで、私の話を聞いてくれた裁判官ではなくほかの人が書いたような判決文だと感じた。」というものでした。しかしこれに屈することなく、原告も弁護団ももちろん最高裁まで訴えていく覚悟という事です。

重要なことは、今後いかにして世論に呼びかけていくか、立法府の国会議員にいかにこの条項が国益の損失につながっているという理解を求めるのが課題です。国際結婚を考える会では、判決日の前の1月19日に参議院議員会館でこの裁判についての説明会を、違憲弁護団とともに開催しました。また海外在住邦人に11条1項がいかに影響を与えているかのアンケート調査が始まりました。国籍法改正要望の請願署名活動のほかに、今後もぜひこのような裁判支援の活動を続けていきたいと思っています。



① オンライン新年会 zoomにて開催
1月9日（土）21：00～ 参加 16名

② 国籍法勉強会 zoomにて開催
A日程 2月22日（月）21:00~22:30 日本時間
（ヨーロッパ在住の方が参加しやすい時間帯）参加36名
B日程 2月23日（火）10:00 ~11:30 日本時間
（アメリカ在住の方が参加しやすい時間帯）参加13名

長年にわたり国籍法請願活動を続けてこられたドイツ在住のトルン紀美子さんによる勉強会を開催しました。外国籍を自らの意思で取得すると日本国籍を自動喪失させる国籍法11条1項、および14条の国籍選択制度について詳しく説明していただきました。

また長年、請願活動に携わってこられた非会員のフランス在住のピレー千代美さんにも出席していただき説明会に加わっていただきました。参加者の皆さんから活発なご質問やご自分の体験からのご意見がたくさん出され大変興味深い勉強会になりました。

JAIFホームページの「お知らせ」のページに「国籍法勉強会の資料集」というページを設けましたので、ぜひご覧ください。

国籍法勉強会の資料集 | JAIF (kokusaikazoku.com)

③ 第2回海外会員オンラインお茶会（zoom親睦会）
3月20日（土）21：00～ 日本時間

コロナ禍の中での日本との行き来をされたメンバーに様子を伺ったり、近況報告など、好きな飲み物片手に楽しく語り合いました。欧米からアクセスし易い日時を設定しました。参加10名。主催（アメリカ在住）アレン美紀さん。

海外在住の日本人の外国籍取得についてのアンケートにご協力お願い致します

<締め切り | 2021年7月末>

「国際結婚を考える会(Japan Association of Intercultural Families)」では、日本人の外国籍取得に関するアンケートを作成致しました。本調査の対象となる方は、海外在住の日本人（または元日本人）の方です。日本にお住まいの方、更に海外在住の方は、ぜひ、お知り合いの海外在住の日本人の方々に、ホームページを通じて[アンケートのリンク](#)をお送りください。また、ご回答くださる予定の方にも、このアンケートを拡散して頂きたい旨、お知らせ頂けると嬉しく思います。出来るだけ大勢の方々からご回答頂くことを希望しております。尚、アンケートの締切は2021年7月末とさせていただきます。

海外在住の日本人の外国籍取得についてのアンケートに ご協力お願い致します <締め切り | 2021年7月末>

アンケートの趣旨は以下の通りです。

国籍法11条1項により、自らの意思で外国籍を取得した日本人は、日本国籍を自動的に喪失してしまいます。2018年3月、欧州に住む8人がこの規定の違憲性を問う「国籍はく奪条項違憲訴訟」を提起しましたが、2021年1月、東京地裁は請求を退ける判決を下しました。原告は上告しましたので訴訟は継続中です。

敗訴となった要因のひとつとして、この国籍法条項が、海外で暮らす日本人に対してもたらす困難な実情が、日本社会に十分に伝わっていないことがあると思われまます。

本アンケートの目的は、外国籍を取得された(元)日本人の方、そして日本国籍を維持するために居住国の国籍取得をしない方、取得を躊躇している方から、できるだけ多くのご回答を頂き、国籍法11条1項が、皆さまがよりよく生きる上で、具体的にどのような制約になっているかを明らかにすることです。

アンケートの結果は、国籍法改正に向けた請願活動で、国会陳情における資料として活用し、更に違憲訴訟弁護団の方々に参考資料として提供したいと考えております。

このアンケートは匿名で行いますが、後日、補足調査のためご連絡させて頂いても構わない方は、メールアドレスをご記入頂くことになっています。補足調査で個別に質問させて頂くこと以外に、メールアドレスは使用致しません。また、皆さまのご回答は個人情報保護のもと、公開、転送などは致しません。

国籍法についてのご質問は「国際結婚を考える会」

kokusaikekkonwokangaerukai@gmail.comにお寄せください。また、当会のホームページに国籍法に関する情報がありますので、是非ご覧ください。国籍法勉強会の資料集「国籍はく奪条項違憲訴訟」原告団が実施したアンケート調査結果の論考は下記サイトでお読みいただけます。

<https://irdb.nii.ac.jp/00868/0004504868>



★2021年度 定期総会を開催します★

来る5月6日(木) 議案などの総会資料とオンライン議決行使書、委任状などを全会員に配信します。会則の改定、事業報告、会計報告、世話人、事業計画、予算などが議案となっています。

5月16日(日) 日本時間3時 オンラインZOOM総会

ドイツ 午前8時 イギリス 午前7時 米西海岸 午後11時
米東海岸 午前2時 ハワイ 午後8時

詳細は、ニュースレターをご覧ください。なお、総会にかけたい案件、ご質問などありましたら、マリクまでご連絡ください。
kokusaikekkonwokangaerukai@gmail.com

次回予告 | 会報誌第4号 (2021年07月31日発行予定)

特集：●海外で女性が働くということ。

2021年3月30日、世界経済フォーラムが発表した男女格差レポート(ジェンダーギャップ)指数で日本は120位(156カ国中)と発表されました。政治参加が少ないことが評価を下げたという指摘があります。また、同じ時期に国連が発表した「世界幸福度ランキング」でも56位(149カ国中)にとどまっています。

そんな日本を縁あって飛び出し、海外で働き、生活する女性にお話を伺います。また、海外から日本で働く外国人女性にもお声をかけていきます。今号の特集でも海外で活躍しているJAIF会員が多いことがよくわかります。ぜひ投稿にご協力ください。離れているからこそ自国についてわかること、見えることもあるでしょう。そしてこれからの私たちに助言もいただきたいと思います。また特集以外でもみなさまの近況などエッセイも募集いたします。気軽にご連絡、ご参加ください。



<編集部、山下牧さん主催の教室の子どもたちの作品>

編集後記

◆ 本号より会報の編集に携わらせていただくことになりました。今回の「コロナ禍での国際家族の真実」というテーマで寄せられた記事はどれも、各国の個人的な生活体験としてのコロナ事情を追体験できるような興味深いものでした。それぞれのお国事情や政府に対する国民感情といったものまで、普段新聞記事などで目にする一般的な情報に、身近で新鮮な情報を上書きするようにして面白く読み進めました。また、会員の皆さまがこれまでに培っていらした会内外の幅広いネットワークが、まさにこの会の宝物である、と編集会議を通じて改めて感じました。JAIFがより幅広く世代を越えて繋がっていくきっかけになるような会報づくりを、微力ながらもお手伝いしていければと思っております。

山下 牧

◆ 会報3号に原稿を書いてくださった皆様、本当にありがとうございました。カマーゴ晃さんは、ニューヨークで実際に感染した体験を書いてくださり、どれだけ、恐怖だったかと思いました。M・Yさんのお子さんがパパを思って書いた七夕の短冊には、ほろりとさせられました。コロナ鬱になりそうな私は、原稿を拝見して、コロナで大変な中を頑張っている皆さまに大きな勇気をいただきました。一日も早く、コロナが収束して、国を超えて、親しい人と会うことができますように。

小暮朋子

◆ 世界中がコロナにコントロールされているこの1年余り、其々の国での今まで体験したことのない制約のある生活、人々の反応をお書きいただきました。皆さんの原稿を読みながら、私にとって瞬く間に過ぎて行ったこの1年余り、どう過ごしてたのか、改めて振り返る機会になりました。来年の今頃は、コロナ禍、あれはもう過去の出来事と言える世の中に戻っていることを願っています。

ハワード弘子

◆ サーズSARSはハクビシンから、マーズMERSはラクダ、エイズHIVはチンパンジーそして今回のコロナCOVID-19はこうもりが感染源ではないかと言われていきます。自然との共存が出来ていない人類への警告かもしれないと考えるのは大げさでしょうか？

今回、9人のメンバーがそれぞれのお住いの国の事情とご自分の貴重な体験を投稿してくれました。ありがとうございました。ひとつひとつが生き生きとした体験で世界中が同じ新型コロナ禍の中で苦しんでいるということが実感としてわかりました。自分の国だけが良くなればいいという、一国主義からお互いを支え合うことが出来るグローバリズムへ転換しなくてはいけない、と改めて思います。なんだか話が大きくなってしまいましたが国際結婚をしたグローバルなJAIFの心意気を読み取ってもらえたら編集に関わった一人として嬉しいかぎりです。

コールマンひろみ

◆ 2021年7月開催される予定の東京五輪。「人類がコロナに打ち勝った証し」と日本国のリーダーは唱えている。変異株が猛威を奮い、感染者の数値は日々増加し、ワクチン接種はG7の中でも最下位である。日々感染者数の発表を速報で伝えられるたびに、恐怖と無力感に襲われている地球市民は、救世主はどこにいらっしゃるかと天を仰ぐしかないのだろうか。コロナ禍は、いかに科学的知見をもったリーダーシップが必要であることを教えてくれた。無関心や見ないふりをするのはしまいと、心に刻む。投稿してくださったみなさまありがとうございました。これからもご協力よろしく申し上げます。

カマーゴ・李 栄

